

四国 三嶺～意外と雪深い四国の山～

【報告者】A屋

【日時】2012年1月7日～8日 【天候】曇のち晴れ

【参加者】N尾(L)、I丸、B場、A屋

《コースタイム》

7日 名頃駐車場(11:30)～新道～ダケモミの丘～三嶺ヒュッテ(16:30)

8日 三嶺ヒュッテ(8:00)～三嶺山頂～ケダモミの丘～旧道～名頃駐車場(12:30)

《 報 告 》

■概要

四国は徳島県と高知県の県境に位置する剣山山系の三嶺(みうね)1893mに登ってきた。当初計画では三嶺を通過し天狗塚までを往復する縦走計画であったが、予想以上に積雪が多く、三嶺山頂直下の急斜面に時間を要したため、三嶺山頂の山小屋で宿泊し、翌日下山する行程となった。2日目は快晴となり三嶺山頂からの眺望は素晴らしく、遠くは石鎚山や中国地方の山々まで見渡せるものであり恵まれた山行であったと言える。

■1日目

山陽道、瀬戸大橋、高松自動車道、徳島自動車道と乗り継いで、名頃の登山口に到着したのが11:00頃。ここから、当初の目的地であるお亀岩避難小屋までの無雪期のコースタイムが6時間程度であることから15:00までに三嶺山頂を通過できるかどうかが一つの目安となる。名頃駐車場にあるトイレは冬季には閉鎖されており使用することも水を汲むことも出来なかった。いそいそと登山準備をしていると、三嶺名物の白い犬が近づいてきて「今から山に登るの？」と問いかけるような顔で甘えてきた。

11:30より登山開始。登山口を示す標識に従って登り始めると、本来、谷筋の林道を通るはずであるルートとは異なり、尾根をたどる地形図にないルートを進むことになった。白い犬(仮称：“うね”、オス)がトップで我々の先導をしてくれる。(もちろんテープもしっかりあった。)しばらく進むとこのコースは“新道”として新設されたルートであることがわかる。

2時間ほど進むと“うね”は突然立ち止まり、「ここでお別れだね。」と言わんばか



【皆のアイゼン装着をチェックする“ウネ”】

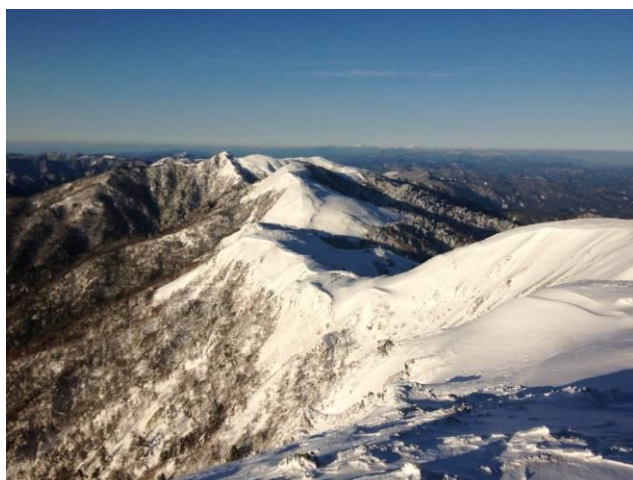
りに立ち止まり、我々の姿が見えなくなるまで見送ってくれた。直後から積雪が深くなりラッセルに息が上がる。本来の登山道との合流地点であるダケモミの丘で、旧道を通ってきたと思われる先行者のトレースに合流するものの、雪深くで断念したのであろうかトレースは引き返していた。再びトレースなしのラッセルが続き、なんとか森林限界を超えた時点で 15:30 を過ぎており、今晚の宿泊地は三嶺ヒュッテにほぼ確定。

三嶺山頂直下の岩場を巻くような急斜面を登れば山小屋である。しかし、樹木の生えていない、滑落すれば2~300m程度下の谷底まで止まれないような急傾斜を登る必要があった。無雪期であればこの斜面を横断するような歩きやすい登山道があるはずだが、膝上に達する積雪がルートを完全に覆い隠し、夏道の位置は分からなかった。仮に夏道が分かったとしても雪崩や滑落の危険性があったため、リーダーN尾さんの判断で斜面を直登し、山頂直下の岩場の真下を巻くようにルートを取り、そこから山頂への登り口を探すこととなった。三嶺にはシカによる植生被害を防ぐためにネットが張り巡らされているのだが、このネットが、万が一の滑落も防いでくれるありがたいものとなった。一方、岩場の真下に接近することで山頂へのルートがどこに有るのか下から仰ぎ見ることが困難となり、しばらく



【三嶺ヒュッテと剣山方面】

ルートを探しながらのトラバースが続いた。先頭でルート探索を行なっているリーダーより撤退の選択肢も示唆されたが、時刻はすでに4:30ごろになり、雪もちらつく薄暗い空となっていたため続行となった。GPSの示す座標値とI丸さんの地図から目的の山小屋がほぼ真上にあることがわかり、岩場を避け



【いつか再挑戦 天狗塚方面の縦走路】

るように直登すると、小屋を示す標識にたどり着いた。無雪期では 10 分程度のこの区間に、雪があることで 50 分程度を要したことになる。

この急斜面と格闘中に、私は急に吐き気に襲われた。行動する気力がみるみる衰える体調の変化に自分でも驚いた。高度障害なのか（1800m で？）シャリバテなのか、この場面で動けなくなるのはマズイなあと



【下降ルートを確認する様子】

考えつつ、最後尾をヨチヨチついていき、山小舎が見えた時は心底ほっとした。

山小舎から登ってきたルートを見下ろすと、距離こそ短いものの結構な急斜面であり、それなりの経験者でないと登ろうとしないだろうなあ、とトレースが全く無かった理由がわかったような気がした。山小舎には 1 名の先客がいたが、別ルートで登ったらしい。

■ 2 日目

翌朝は 6:00 に起床し 8 時に三嶺山頂に向けて出発。山頂は快晴で、360° の素晴らしい展望に感動した。

下山ルートは前日と同じ斜面を降りる。急傾斜区間はリーダにザイルを出してもらい、ダガーポジションで後ろ向きに降りていった。初めてのザイル確保の体験であったが、ザイルが一本あることの安心感は大きなものであった。

順調に下山を続け、ダケモミの丘の分岐からは登りとは別の旧道を通して下山した。この旧道は谷地形であり雪深く結構な斜面であることから、登りには新道を通るほうが楽である。

12:30 無事、名頃登山口に到着し、帰福の途についた。

■ 総括

四国は予想外に雪が深く、九州の山と比較にならないほどであった。

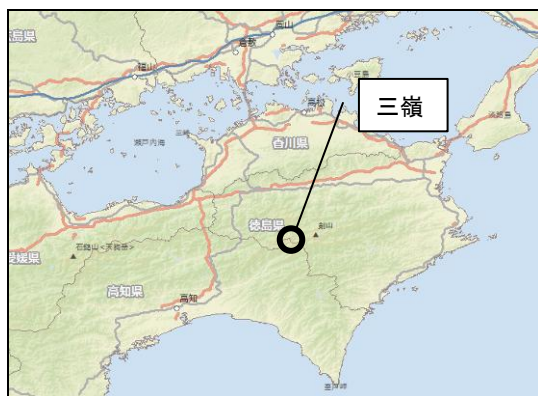
無雪期では 3 時間程度のルートでも、積雪期のラッセルでは 5 時間と倍近い時間を要するため、冬場は余裕を持った行程とスピードアップできる体力が重要であると改めて感じた。一方で、三嶺は眺望もよく、アイゼンやピッケルワークに慣れてきた雪

山初級者がステップアップしたい場合は非常に良いコースだと感じた。(もちろん経験者の同行は必須)

個人的には山頂付近で発生した高度障害のような症状に対処するため更なるトレーニングや体調管理が課題となった。

すばらしい山行を計画・リードしていただいた N 尾リーダー、I 丸サブリーダー、フォローしていただいた B 場さんに感謝する。

《ルート図》



移動距離 (片道) : 約 6km, 標高差 : 約 900m